

思い出の並木道

西田 由里子 大阪府堺市 六十三歳

並木道、それは夢や希望を与えてくれる。又、一方で過去の思い出や哀愁を演出してくれる。

ポプラ並木はぐんぐんと大きくなり、子どもの頃にそこを通ると希望が沸いてきた。けやき並木は力強く、悩み多き青春時代に生きる力をもたらした。大人になり、黄色く色づいたイチヨウ並木で彼とデートをした。落ち葉が黄色い絨毯になり、寝転んで将来の夢を語り合った。恋が実らずメタセコイヤの並木を自転車で突っ走ったこともあったっけ。

縁あってめでたく彼と結婚、桜並木を花嫁衣装を着て二人で歩いた。子どもたちともよく並木道を探しに出かけたが、今はそれぞれの思い出を抱いて巣立っていった。

熟年になり夫婦で旅先のスズカケの道を腕組んで散歩した。もう気恥ずかしさもない。楽しかった思い出だけを語りながら・・・この春には九十歳を過ぎた母の車椅子を押しながら、あの桜並木を散歩した。はらはらと花びらが母の膝に落ちた。母はそれ喜んで、私は母の余命と重なり涙をこらえた。

若葉の並木、紅葉の並木、落ち葉の並木、枯れ枝に雪を乗せた並木、夜明けや、夕暮れ時の並木道の散歩もよい。それぞれの並木道は私の人生を知っている。並木道さん、ありがとう。